

(7)

オピニオン

(第3種郵便物認可)

黒潮が日本と初めて出会う地、海の彼方にある理想郷ニライカナイの伝説が残る八重山諸島。与那国、波照間、西表、黒島、小浜、竹富、石垣といった島々からなる。紺べきの海はどこまでも広がり、水平線の先に海と空が溶ける。積乱雲が立ち上り、カモメが沖を飛ぶ。平和に満ちた光景が眼前に広がる。

今回の訪問は成人T細胞白血病ウイルスと呼ばれるウイルスに関する研究のためだった。が、もう一つ、秘めた目的もあった。戦時中にこの地で多くの人の命を奪ったマラリアに関する古老の記憶を少し聞きたい、あるいは文献を調べたいと思っていたのである。マングローブの森が汽水域に広がる西表島。人の手が入っていない



やまもと たろう
山本 太郎

忘れること勿れの石

長く妨げた。それだけでなく、人間の無知は、この島に多くの悲劇を残した。その一つが「戦争マラリア」。戦時中に強制移住させられた人々が、次々とマラリアで倒れた。なかでも、島の南、南風見(ハエミ)海岸を舞台とした「忘勿石(ワスレナイシ)」の話には心打たれる。

南風見は強制疎開後、国民学校の青空教室として入学式と授業が

国民小学校の識名信升校長(故人)。「この岩場に座って勉強していた生徒からマラリアによる死亡者が出た(中略)その事実を忘れてはいけないという思いを込めて刻んだ」。晴れた日には、遠く南に波照間島を望むことのできる海岸に、こんなに悲しい歴史があった。

い自然。が、それも、この地にマラリアがあったがゆえと聞けば悲しい。マラリアの瘡癩(しようれい)は人々がこの地に暮らすのを

行われた場所。しかしマラリアが多くの児童の命を奪う。そのことを「忘れること勿(なか)れ」と刻んだ当時の波照間(ハテルマ)

西表島からマラリアが根絶されたのは1963年。本格的な開発はそれ以降に始まる。今年83歳になる島の「おばあ」は、六十数年前に西表に来た時、長くは生きられないと思ったと言う。「それが今も生きていられるのも、マラリアがなくなっただおかげサネ」と話の後に笑った。
(長崎大熱帯医学研究所教授)